



Title	表現不可能なものの表現 : 初期ドイツ・ロマン派における哲学・批評・文学
Author(s)	小川, 伸子
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42009
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 小 川 伸 子

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 15104 号

学 位 授 与 年 月 日 平成12年 3 月 24 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当

文学研究科芸術学専攻

学 位 論 文 名 表現不可能なものの表現
—初期ドイツ・ロマン派における哲学・批評・文学—

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 神林 恒道

(副査)

教 授 上倉 庸敬

教 授 森谷 宇一

教 授 林 正則

助教授 藤田 治彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文はドイツ・ロマン派の芸術運動の中心的人物であった、文芸批評家フリードリヒ・シュレーゲルと詩人ノヴァーリスの芸術思想を軸として、この時期起こってきた芸術の思想状況に新たな解釈の光を当てようとした試みである。論文の構成は、全体の構想を述べた「序章」とこれに続く五章からなっている。

第一章「フリードリヒ・シュレーゲルにおける批評の問題」では、まずシュレーゲルの文芸批評の出発点である『ギリシャ文学研究』から、いかにしてその歴史的批評的意識が形成されていったかが論じられる。続いてカント解釈をめぐる当時の思想状況のなかで、シュレーゲルが目指した批判主義がどのような位置を占めるのかが問われ、フィヒテ哲学の批判的解釈を通じてシュレーゲル独自の哲学的立場が明らかにされる。そこから成立したのが、歴史的個体の相互証明のプロセスを経て形成される解釈学的批評の方法である。

第二章「ノヴァーリスの『フィヒテ研究』における表現の問題」では、ロマン派の「共哲学」の観点から、シュレーゲルと深い関わりをもつノヴァーリスの『フィヒテ研究』が、その内在的批判においていかに相互に響き合うところがあるかが考察される。続く第三章「1800年、シェリング対 F・シュレーゲル」では、ロマン派の哲学者といわれてきたシェリングの『超越論的観念論の体系』とシュレーゲルの『超越論哲学』が比較検討され、両者の超越論的視点の原理的差異が指摘される。

第四章「フリードリヒ・シュレーゲルにおけるイロニーの概念」と第五章「フリードリヒ・シュレーゲルにおけるアラベスクの概念」では、前の三章においてこの時期の哲学思潮との連関でさまざまな角度から分析されたシュレーゲルの思想が、その文学論や芸術論において具体的にどのように語られているかが、『リュツエウム』および『アテネウム』の断想を中心に検証されている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

この研究のヒントは、D・ヘンリッヒとM・フランクの提唱する「布置研究 Konstellation-Forschung」に負っている。その目指すところは、思想史を独創的な思想家の体系の直線的発展において捉えるのではなく、体系化以前の思想の発酵過程における状況に注目し、思想交流や論争を通じて浮かび上がってくる思想的布置を明らかにすること

によって、硬直した思想史の図式を批判的に捉え直そうとするところにある。

第一章において、論者はこの方法論に基づく綿密な資料の分析と理論の積み重ねにより、シュレーゲルを中心にロマン派の哲学的世界観を析出することに成功している。その論証の核心部分をなすフィヒテ哲学の内在的批判は第二章に受け継がれ、ノヴァーリスの『フィヒテ研究』についてのユニークな図式化の方法を用いた解析によって深められる。そこにまたシュレーゲルの歴史的個体の解釈に向かう批評理論に通底する思想が指摘される。ここに至る過程で、初期ロマン派の芸術哲学が内包する微妙な表現を縫うようにして、そこにその新たな思想史的定位を明らかにした点は高く評価することができる。第三章で論者は、無限に生成する宇宙あるいは個体をその思想の核心に置くシュレーゲルの『超越論哲学』を、シェリングの体系的哲学思想と比較を試みるが、その際のシェリング批判はいささか一面的であり方法論的にも問題なしとは言えない。今回の論文はあくまでシュレーゲルとノヴァーリスの研究の圏内に留めるべきではなかったかと思う。続く二章で論者は、こうした哲学的思索が、シュレーゲルの文学論および芸術論で具体的、実践的にどのように反映されているかを、イロニー論あるいはアラベスク論のアフォリズムを解説する作業を通じて提示しようとするが、その相関関係は必ずしも十分に証明されたとは言い難い。

しかしこれらの不備と思われる点も、従来の解釈と一線を描こうとした新たなロマン主義思想の解釈とその将来に向けての発展的可能性を提示したことによって十二分に補うことができると考える。以上の評価に基づき、ここに本審査委員会は一致して本論文を、博士（文学）の学位を授与するに値するものであると認定する。